

原野先生に学んで

重見晋也

私が広島大学文学部に入学した1988年は、杉山毅先生が退官された翌年あたり、原野先生お一人で研究室を切り盛りなさっていらっしゃっていました。といっても、学部の1年生であった私が原野先生の授業を受講することなどはありませんでしたし、何よりも研究室の行事にはあまり寄りつかないでいましたから、先生と近しくさせていただいたという記憶どころか、お話しした記憶さえ残念ながらありません。

一年目からそういう調子でしたので、いつも遊びほうけていた私が先生の姿を拝見するのは、千田町キャンパス時代に毎年恒例となっていた言語学研究室とのソフトボール大会（「仏言ソフト」と呼んでいたように記憶しています）の時からだったように思います。先生は毎回広島女子大学の隣にあった宇品第一公園の会場に颯爽とお越しになり、学生たちと一緒に朝早くから夕方までソフトボールに興じ、夜は酒宴を盛り上げていらっしゃいました。

キャンパスも東千田から東広島に移転となり私が博士後期課程に入ったのが1994年のことでした。私が1995年に1年間のフランス留学から帰国してからは、幸運にも原野先生の研究をお手伝いする機会に恵まれ、さらにその翌年からはリサーチ・アシスタント（RA）として先生の研究補助をすることになったのでした。

RAとしての作業内容は先生が鈴木・福本の両先生とご一緒に校訂なさった『狐物語』のγ版の全枝葉を、コンピュータにテキスト・データとして取り込むというものでした。フランス図書から出ていた2巻からなる『狐物語』の校訂本をカッター・ナイフでバラバラにし、1ページずつスキャナーで読み取ってワープロ・ソフトに保存する作業のため、週に何度かほぼ1年にわたって原野先生の研究室にお邪魔し続けたのでした。

困ったことがあると先生の助言を仰ぎながら作業を続けたのですが、何よりも驚いたのは先生が新しいものに対してお示しになる興味の食欲さでした。新

しい機器やソフトウェアの情報を入手なされると、「こういうものがあるらしいのですがどうですか?」と話を切り出され、研究に使えるかどうかを私に確認なさるのです。私はそれほど深く考えるでもなくいつも曖昧な返答しかしていませんでしたが、今となって思えば私の態度に先生は歯がゆい思いをされていたに違いありません。

しかし私にとっては、この研究補助の期間中にこれまでになく、先生の常に真摯な研究者としての態度に接したことが、その後の研究の大きな糧になったのでした。あの1年間の貴重な経験が、コンピュータを使った文学研究に足を踏み入れるきっかけとなったのですし、また研究の一翼を担うべく自分でプログラムを書いてみようという気にもなったのだと思っています。何よりその研究補助の成果が *Concordance du Roman de Renart d'après l'édition γ* として2001年に公刊された際に、先生との共著という形で名前を連ねさせていただけることになったのは光栄の至りでした。

現在は名古屋大学で電子テキスト学という全く異なった授業を担当していますが、私が名古屋という広島から離れた街で教壇に立っていただけるのも、先生の研究室に通い詰めたあの1年があったおかげですし、そのときに先生から研究者としてのあるべき態度を教えて頂いたおかげだと感謝しております。

20年近くにわたりフランス文学研究室を運営するにあたりさまざまなお苦勞があったと拝察いたしますし、私自身が先生に多くのご迷惑をおかけしてきました。広島大学を退職なさった後もこれまで以上のご活躍を通して、研究者としてのあるべき姿をわれわれにお示しくくださいますよう希望します。そして最後になりましたが、本当に長い間ご苦勞さまでした。